opusdei.org

戦い、親しさ、使命 (6) 痛悔と和解

「私たちの心より大きい」神のみが私たちの心を癒し、霊魂の奥底からの和解を実現することができます。

2025/07/15

イエスのもとには大勢の人がやってきましたが、その理由の一つは、彼の「治るはずのないものを治す力」でした。主は、驚くような奇跡や力強く独創的な説教、親しみやすさやユーモアによって、そして聖書に記

された約束のメシアとして大きな注目を集めましたが、多くの人がイエスに近づいたのは、病人に対する奇跡によるものでした。人々の間では、「重い皮膚病や中風の人、目や耳や口に障がいのある人、身体が不自由な人がイエスの言葉やしぐさによって癒された」とのうわさが広まっていました。

しかし、その「神秘的な医者」が、 身体を癒したのは、さらに大きな 力、つまり魂を癒す力を示すためで もありました。イエスは、私たちの 心の奥底を癒し、霊魂の根本に神と の和解を与えます。それは神にしか できないことです。「『あなたの罪 は赦された』と言うのと、『起きて 歩け』と言うのと、どちらが易しい か。人の子が地上で罪を赦す権威を 持っていることを知らせようし。そ して、中風の人に、「わたしはあな たに言う。起き上がり、床を担いで 家に帰りなさい」と言われた(ルカ

5・23-24)。主が特に癒したいと 願っているのは、神からの恵みに気 づくことのできない私たちの内なる 盲目です。また、自分の中にある悪 を言葉にできない口の不自由、神の 声や隣人の必要に耳を傾けることが できない聴覚の鈍さ、真の自由へと 向かうことができない麻痺、そし て、自分は神の愛にふさわしくない と思い込ませる重い皮膚病を治した いと望んでいます。イエスの生涯の すべての瞬間、特に受難と復活は、 この私たちを癒したいという主の切 望の表われです。癒されるために必 要なことはただ一つです。治癒を望 み、治す力のある方を前にして自ら の病と傷を隠さないことです。

「神は私たちの心より大きい」 (一ヨハネ3・20)

「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、ま

た、和解のために奉仕する任務をわ たしたちにお授けになりました| と、パウロはコリントの人々に書い ています。「つまり、神はキリスト によって世を御自分と和解させ、 人々の罪の責任を問うことなく、和 解の言葉をわたしたちにゆだねられ たのです」(ニコリント 5・ 18-19)。初代のキリスト教共同体 は、神との和解、他者との和解は、 神からのみ与えられる恵みであるこ とを理解していきました。それは当 時の社会の厳しさとの対比によって より明確にされたかもしれません。 彼らは、自らの償いによって神のゆ るしを〈作り出す〉ことはできない こと、それは神が無償で与える恵み であり、それゆえ、ただ感謝のうち に受け取ることしかできないことに 気づきました。

私たちは気づかないうちに、神のゆるしに対して、あまりにも〈人間的な論理〉を当てはめてしまうことが

あります。厳しい法的な考え方に基 づくと、「罰を受けること」「損害 を償うこと」などが重視されませい。 しかし、まさにこのような論理を しかなる絶望を生みだす論理を超 るためにイエスは来ました。「 正義がいかに深い慈しみにあれる いるか、考えてみなさい。人間の もれると罰せられる が、神の裁きにおいては赦される」

ヨハネの第一の手紙は、私たちを平 和で満たす言葉で、この慰めのよした セージを伝えています。「わたした ちは (…) 神の御前で安心できま す、心に責められることがあろうと す。神は、わたしたちの心よりである。 も。神は、わたしたちの心よでなる。 (一ヨハネ 3・19-20)。イエスと り返し、「わたしは、世を裁ったと ではなく、世を救うために来た」 (ヨハネ12・47)と言いますが、そ れでも私たちの心には、不安へと導 く、内なる声が響くことがあるかも しれません。たとえば、神がすべて をゆるしてくれることを信じること ができないことから生じる諦めへの 招き、または何度も何度も自らの弱 さを目の当たりにすることに耐える ことができない高慢の声などです。

教皇フランシスコは、そうした声に 打ち勝つように私たちを励ましま す、「兄弟、姉妹であるあなたへ。 もしあなたの罪があなたを怯えさせ るなら、あなたの過去があなたを不 安にさせるなら、あなたの傷口が寒 がらないなら、あなたの繰り返され る堕落によってあなたが意気消沈す るなら、あなたが希望を失ってし まったように感じるなら、どうかお 願いします、恐れないでください。 神はあなたの弱さを知っています。 そして神はあなたの過ちより大きな 方です。神は私たちの罪より大きい のです、はるかに大きいのです。あ なたに一つだけお願いします。あな

たの弱さや惨めさをあなたの中にしまい込まないでください。そうではなく、神のもとに持っていき、それらを差し出しましょう。そうすれば、それらの絶望の要因は、復活のきっかけに変わるでしょう」[2]。

同じように聖ホセマリアも、イエス に近づいた人々の姿に着目するよう 招きます。彼らは、物的にも霊的に も、〈治療の代価〉を払うすべを 持っていませんでした。しかし、 「代価を払うすべがない」と自覚す ることが、彼らを真の霊的生活、つ まり無償の恵みを中心とする生き方 への扉を開きます。「私はあまりに も罪深い人間だから主は耳を貸して くださらない、とでも思うのです か。そんなことはありません。主は 憐れみの泉です。(…)人々がイエ スの前に中風の人を運んできたとき の情景を心に描きなさい。聖マタイ の話に注目してみましょう。あの病 人はひと言も口にしません。ただ、

そこ、神のみ前にいるだけです。それに対しキリストは、病人の痛悔の心と功徳もない自らを悔やむ病人の心に動かされ、すぐに、いつもの憐れみをお示しになりました。『子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される』」[3]。

主よ、隠れた罪からわたしを清 めてください

「わたしは罪をあなたに示し、答を 隠しませんでした。わたしは言さたした。 した、『主にわたしの背きたはもちとき、あたささされたさきなした」と。 した』とと過ちを赦して持編などもでもできるがである。 は、神がいう確信がいるはいるといるで私であるますのでももである。 がで私たちもエスのでもいでももである。 は、などでもなっているである。 がでもなっていている。 がである。 は、などの悪を愛によって贖う「救いの悪を愛によって贖う「救いの悪を愛によって 業」にあずかるため、まずはへりく だって自らの罪を認めます図。

自分の罪に気づき、それを認めよう とするこの姿勢のことを、ある人は 病的なもの、または不必要な重荷を 心に負わせるものだと理解します。 確かに内的生活の成長を妨げる小心 は避けねばなりません。しかし健全 な罪意識というものがあり、それは 心の翼を広げるために欠かせないも のです。責任のあるところに本当の 自由があります。そうであってこ そ、私が行ったことは本当に「私 が | 行ったことになるのです。霊的 な成長には現実を直視することが欠 かせません。たとえ不安や良心の呵 責を伴うものであっても、自分の行 いをまっすぐ見つめることが必要で す。神とともに、自分の思い、言 葉、行い、そして怠りに目を向け、 神に背き、他者を傷つけ、主と他の 人に対して無関心であったこと、自 分自身に害を与え、魂の中に悪を育 ててしまったことを見つめるのです。なぜなら真理のみが、私たちを本当に自由にするからです(ヨハネ8・32参照)。ですから、特に自らが生きてきた人生についての真理と向き合うことは真の自由への道です。

自己を見つめるにあたり、私たちは 三つの誘惑を避けなければなりませ ん。第一は、表面的な良心の糾明 や、内的沈黙を避けることによっ て、自分の責任を軽視することで す。聖霊は、内的静寂という空間に おいて、私たちについての真理を明 らかにします。第二は、責任を他人 や状況に転嫁することです。そのこ とにより、自分はいつも被害者であ り、また自分は誰にも害を与えてい ないと思い込んでしまいます。そし て第三は、自分のみじめさを受け入 れることができない高慢から生じる 失望です。神に背いたり、他の人を 傷つけたりしたことを悔いるのでは

なく、自分自身のプライドが傷つい たがゆえにがっかりするのです。

「知らずに犯した過ち、隠れた罪か らどうかわたしを清めてください。 あなたの僕を驕りから引き離し、支 配されないようにしてください。そ うすれば、重い背きの罪から清めら れ、わたしは完全になるでしょう | (詩編 19・13-14)。健全な罪の意 識の背後にあるのは、「病的に非の 打ちどころのない履歴を収集する| 「biような態度ではありません。そう ではなく、自分を神から遠ざけるも の、心の内や周囲に分裂を生み出す もの、愛することや愛されることを 妨げるものを「無視したくない」と 願う謙遜な心です。私たちが告白す るのは、ただの「不完全さ」ではな く、無関心や愛の欠如といった、具 体的な言動に現れた心の状態なので す。「主よ、私の愛よ、私の中に、 あなたを悲しませるものがなかった でしょうか? | ほこのような姿勢

が、自分についての真実を落ち着まで見つめるための光をもたちをして、その光が私たちをそして、そのとなれます。とないはするではないないないないないではないです。神なしにはいいではないであり、「連続いるに、かし」「Mの推進力となります。

世界に美しさを取り戻す秘跡

聖アウグスティヌスは「教会とは、神と和解した世界である」はと述べました。ですから、神の家族は「世界を神と和解させること」を通して成長していきます。「これこそが、すべての人の偉大な使徒的使命です」で、そしてゆるしの秘跡は、この和解の実現において中核的な役割を果たします。この秘跡によって私

たちは咎から解放され、罪から距離 を置くことができます。無条件に愛 してくださる御父の前では何も隠す 必要がないと悟ることができます。 告解の秘跡は、私たちが自分の弱 さ、矛盾、傷と向き合うことを助け ます。それらを癒すことのできる唯 一の医者のみ前にすべてを提示する のです。聖パウロは神に対する信頼 を持つように私たちを励まします。 「だから、キリストの力がわたしの 内に宿るように、むしろ大いに喜ん で自分の弱さを誇りましょう」(二 コリント 12・9)。

このような信頼は、同時に痛悔、すなわち、自らの中にある悪に苦しむ心と結びついています。「わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています」(詩編 51・4-5)。カトリックの伝統は、痛悔には2つの種類があると言

います。一つは神への愛から生じる もので、これは三位一体の神――私 の人生において最も大切な存在―― の愛を拒んだことを悔やむもので す。もう一つは間接的に生まれる痛 悔で、たとえば「罪の醜さを思う 心、あるいは永遠の罰 (…) に対す る恐れなどから生じるもの | ftofで す。前者は「完全な痛悔」と呼ば れ、この痛悔によって、たとえ大罪 であっても、「できるだけ早くゆる しの秘跡を受けるという固い決心し fiiiがあれば、神はその罪をゆるして くださいます。後者は「不完全な痛 悔 | と呼ばれますが、これも「神の たまものであり、(…) ゆるしの秘 跡においてそのゆるしを得るための 心の準備となりますしい。痛悔の祈 り――たとえば一日を通して何度も 唱える「イエス様、ごめんなさい」 といったような短い祈り――は、心 の痛みを呼び覚まし、神のあわれみ を一層豊かに受け取り、それを他者 に分かち合うことを可能にします。

カトリック教会のカテキズムは、ゆ るしの秘跡――通常の生活において 大罪から私たちを解放する唯一の場 ――とともに、小罪のゆるしを受け ることができるその他の形を教えて くれます。聖書や教父たちは、たと えば「隣人と和解する努力、悔い改 めの涙、隣人の救いへの配慮、聖人 たちの執り成し、『多くの罪を覆 う』 (一ペトロ 4・8) 隣人愛の実行 などを挙げています」「13」。しかしそ れでも教会は、小罪についても、ゆ るしの秘跡を受けることを勧め続け ています。聖パウロ六世はこう述べ ました。「頻繁な告解は、今なお、 聖性、平和、喜びの特別な源泉であ り続けていますしていままと聖ホセマ リアはこう言います。「 小心に陥ら ないよう注意して、毎週、必要なと きはいつでも、悔い改めの聖なる秘 跡、神のゆるしの秘跡にあずかって ください (…)。すると、世界の歓 喜を再発見できる。世界は神の手か ら生まれた汚れなく美しいものです

から、痛悔の心をもつことができれば、世界に元々の美しさを取り戻して神にお返しすることができるでしょう」「™。

頻繁な告解は、私たちの心を繊細に し、冷淡さや神の愛に抵抗すること に慣れてしまうことを防ぎます。べ ネディクト十六世は、こう述べたこ とがあります。「私たちの罪は、多 くの場合同じようなものかもしれま せん。しかし、私たちは自分の家や 部屋を、少なくとも毎週一度は掃除 します。たとえ、同じような汚れで あっても、清潔な空間で生活し、リ フレッシュするためにそうするので す。さもないと、汚れは気が付かな いうちにたまっていきます。同様の ことが霊魂にも言えます。もしまっ たく告解をしなければ、霊魂は放置 されてしまい、やがて自己満足に陥 り、もう自己を改善する必要を感じ なくなるのです。告解という秘跡に おいてイエスがくださる霊魂の清め

は、より目覚めた良心をもたらし、 心を開き、人格的・霊的に成熟する 助けとなります」[15]。

教皇フランシスコは、「和解の秘跡 はキリスト教生活の中心に再び位置 づけられる必要があるしゖゖと記して います。大きな傷の癒しだけでな く、日々のキリスト者としての歩み においても、この秘跡は必要不可欠 な味方です。それは、日ごとに私た ちが自分をより深く知り、神のあわ れみに満ちたみ心に親しむ助けとな るからです。悪へと向かわせる習慣 や性向を、すぐにすべて克服するこ とは難しいでしょう。恵みは、私た ちの人生とともに歩み、それと一体 化されていきます「181。だからこそ、 自分の弱さに対する絶望を生み出す ような非現実的な誤った期待を作り 出さずに、常にイエスに目を向けて いましょう。私たちを癒したいと望 み、実際に癒すことのできる方のも とに、何度でも立ち返っていきま

しょう。なぜなら、「霊的生活とは、絶えず始めること、繰り返しやり直すこと」だからです。「やり直すって? そうだ。痛悔する度に(...) あなたはやり直したことになる。痛悔するごとに、再び神を愛し始めるからである」[19]。

- [1] 聖ホセマリア『道』309番。
- [2] フランシスコ、説教、2022年3月25日。
- [3] 聖ホセマリア『神の朋友』253 番。
- [<u>4</u>] ミサの式次第、回心の祈り参 照。
- [<u>5]</u> 聖ホセマリア『神の朋友』75番 参照。
- [6] 聖ホセマリア『鍛』494番。

- [7] 聖ホセマリア『神の朋友』57番。
- [8] 聖アウグスティヌス、説教96、8 番。
- [<u>9</u>] フェルナンド・オカリス、メッセージ、2023年10月21日。
- [10] カトリック教会のカテキズム、1453番。
- [11] 同、1452番。
- [12] 同、1453番。
- [13] 同、1434番。
- [14] 聖パウロ六世、使徒的勧告「ガウデーテ・イン・ドミノ――喜びの源に立ち返れ――」52番。
- [15] 聖ホセマリア『神の朋友』219 番。

[16] ベネディクト十六世、カテケー ジス、2005年10月15日。

[17] フランシスコ、使徒的書簡「あわれみあるかたと、あわれな女」11番。

[18] フランシスコ、使徒的勧告「喜びに喜べ」50番参照。

[19] 聖ホセマリア『鍛384』番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/combat-closeness-mission6/(2025/11/27)